

遣唐使研究と東アジア史論

鈴木 靖民

I. はじめに

2004年、中国・西安において遣唐使の一員（留学生）と見られる井真成の墓誌が発見され、専修大学と交流のある西北大学の博物館によって蒐集されたことを機に、遣唐使が日本、中国の学界内外の関心を集めている（『東アジアの古代文化』123、2005年、専修大学・西北大学共同プロジェクト編『遣唐使の見た中国と日本』2005年など）。2007年から2008年にかけては、遣唐使に先立つ遣隋使の派遣1400年を記念して日本、中国の各地でシンポジウムなどが開かれた（『遣隋使・遣唐使と住吉津』2008年など）。

井真成墓誌の日本での紹介や研究の進捗などに大きくかかわった専修大学では、2007年より発足した東アジア世界史研究センターが「古代東アジア世界史と留学生」の研究を続けて、公開講座、シンポジウムを催し、その多彩な成果を『専修大学東アジア世界史研究センター年報』1～3で公にしている。

本論は古代の日本の唐との関係の基本を築いた遣唐使の実態と性格に関して、主として日本における最近までの諸研究をまとめて概述する。さらにその上で、日唐間の関係を超越する東アジア史の視角から、東アジア交流史、東アジア史を見直すためのいくつかの論点を提起したい。

II. 遣唐使の時期区分と性格

日本（『日本書紀』『続日本紀』）と中国の正史（『隋書』『旧唐書』『新唐書』）や正倉院文書などによると、遣唐使は遣隋使のあとをうけて（鈴木靖民「遣隋使と礼制・仏教」『国立歴史民俗博物館研究報告』152、2009年）、603年の犬上三田耜・難波薬師恵日らの使節を第1回として、894年の菅原道真の時に停止されるまで、20回の任命が認められる（鈴木靖民『古代対外関係史の研究』1985年、東野治之『遣唐使船』1999年、同『遣唐使』2007年）。そのうち、746、761、762、894年の使節は停止されたので、実際には16回派遣された。また665、667年の使は唐の百済駐留（占領）軍のもとに赴いた使であるので遣唐使と見なさず、761、762年の使を1回分と数えて、18回の任命、15回の派遣とする考えもある（森公章「大宝度の遣唐使とその意義」『続日本

紀研究』355、同「遣唐使の時期区分と大宝度の遣唐使」『国史学』189、同「唐皇帝と日本の遣唐使」『東アジアの古代文化』129、2007年、『遣唐使と古代日本の対外政策』2008年)。したがって、派遣の間隔は不規則で、平均すると10数年に約1度となるが、実は維縞の書状に「唐に二十一年一來の朝貢を約す」とある記載をもとに、20年に1度の派遣という約束を隋以来結んでいたともされる(東野治之『遣唐使と正倉院』1992年、同『遣唐使』2007年)。ただ、当時、7～8世紀、現実に遣唐使が長期的、継続的な制度として認識され、計画されていたと見なすべき確証はない。

260年余にわたって行われた遣唐使は、随時任命される特殊な臨時官司であるが、停止された場合でも内外の事情、背景があることを考慮すると、対外関係総体としては任命されたものを含めて回数を数えるのがよいであろう。その時期区分については、これまでの研究で派遣の目的、性格、規模、航路、間隔、内外の情勢によって、様々な考えが示されている(山尾幸久「遣唐使」『東アジアにおける日本古代史講座』6、1982年、東野治之『遣唐使と正倉院』1992年、保立道久『黄金国家』2004年など)。

そのうち主なものは、1つは7世紀を第1期、8世紀を第2期、9世紀を第3期とする3期区分であり、もう1つは前期の7世紀と後期の8世紀・9世紀初めの遣使とに二分する説である。またそれに最初と最後を加えるものもある。本論では3期に区分して考える。

(1) 第1期－7世紀中葉・後半－

630年から669年までは7回の派遣があった。推古期の623年、遣隋使に従って渡海し医術を学んだ薬師恵日や学問僧たちが帰国して唐の文物、制度の充実ぶりを説き、唐との交流を建議したことに明らかな通り、前の遣隋使の延長としての意味もあり、仏教をはじめとする宗教、学問、技術、技能などの新思想、技芸、知識、制度を学び、日本(倭国)の国制、政治改革や文化の形成に資すること、その上、隋の高句麗征討を受け継いだ唐の朝鮮半島攻略、百濟情勢に対応することに重点が置かれた。

この時期、百濟滅亡の後には遣隋使の時のような百濟の協力はもちろんなく、主として新羅に頼る北路(新羅道)を通ったが、唐の直接の文物、情報を入手できたのは唐による660年の百濟の役が起る前までの630年、やや間を置いた653、654、659年の使節に際してであり、7世紀末、8世紀初めに日本に唐物や律令法典を含む書籍、經典類が存在するとすれば、新羅経由以外は659年以前に将来されたものを基本とすると見るべきであろう(鈴木靖民「日本律令の成立と新羅」『日唐律令比較研究の新段階』2008年)。また上述のように663年の唐、新羅と百濟、倭国の戦争後の665、667、669年の遣唐使は、百濟駐留軍の唐使に対応するもので、唐都まで行かなかった疑いもあり、その役割が余り評価されていない。

ともかく、日唐の交流は669年を最後に32年間途絶えた。この空白期に国際情勢を反映して新羅との間に頻繁な使節の往来が繰り返されたこと、唐に滞在する留学生・留学僧が新羅を経て帰国したこと、併せて彼らは往還に当たって接した新羅の文化、制度を習得した可能性のあることも無視できない。

この期の遣唐使は日本の文化形成、国制樹立のための使命を帯びたことと、東アジア情勢、特に唐・新羅との戦争の影響を受けたことに特色があった。

(2) 第2期－8世紀－

702年から779年までの藤原京・平城京の時代、遣唐使は10回任命され、そのうち3回停止されたが、古代日本の唐への関心が最も盛んな時代であった。また当時、一方で新羅との間に遣新羅使16回、新羅使20回の交流があり、新たに国交が始まった渤海とは遣渤海使11回、渤海使14回という、ともに唐との関係を凌ぐ密接な交流があった事実は、多元的な外交の展開や複合的な文化形成上、重視すべきものである。

702年、再開された大宝度の遣唐使については、律令法の備わった律令制国家の完成を唐に誇示する目的があったか否か、論争がある。法制化された「日本」の国号と「天皇」号を外交の場で公式に用いたのはこの時の遣唐使が最初であった（高橋継男「最古の『日本』－『杜嗣先墓誌』の紹介」『遣唐使の見た中国と日本』2005年）。それに使節一行の組織が大型化し、4隻の船に載って北部九州（博多湾）、五島列島から奄美、沖縄の島々を通る南島路、または東中国海を一気に横断する南路を取り始めたことも、それまでとは異なる点である。この航路の採用は新羅とのライバル関係、南島との交流と無縁でない。754年、鑑真たちが来日時に通った遣唐使の帰国路である南島路については遭難時のコースであるとの異論があり（東野治之『遣唐使と正倉院』1992年）、またその反論もある（山里純一『日本古代国家と南島の交流』1999年）。

さらにこの期の遣唐使が唐朝廷での正月の朝賀を目指したとされることも、遣唐使の目的を考える際に、注意を要する。後述する新羅や渤海の遣唐使は、日本に比べて派遣回数も桁違いに多く、両国ともに唐の冊封（唐皇帝より国王が爵位、官号を受けて臣従すること）下にあるという違いがあるが、賀正使を目的として遣わされた場合が圧倒的に多い。唐朝廷の宮殿で催される儀式の場には東方の日本・新羅・渤海だけでなく、唐を中心とする西方や南方、北方の周辺諸国、諸民族の大勢の使節が一堂に会し、皇帝との賓礼を通じて関係を確認するとともに、国際序列を競い合ったのである。753年の唐朝廷での日本の副使大伴古麻呂らと新羅の使節との席次争い（争長事件）は、新羅との関係を媒介として国際社会での日本と天皇の地位を確保し、認定されようとする必死の行動であったが、唐は臨機応変の対応を見せた（『続日本紀』の記事、または遣唐使の報告を虚偽とする考えもある）。

日本は進貢しても唐の冊封を受けなかったが、遣唐使は唐に「外臣」の「朝貢使」として扱われ、使一行もそれに沿って絹製品や銀、水晶などの特産物を朝貢品として皇帝に進めた。西安何家村と洛陽馬坡で出土した和同開珎の銀銭は、朝貢品を臣下に授けたものかと解釈される（東野治之『遣唐使船』1999年、栄新江「西安何家村出土の埋蔵品と西安の物質文化」『東アジアの都市史と環境史』2005年、江草宣友「海を渡った古代日本の銭貨」『東アジアの古代文化』136、2008年）。

こうした政治、外交上の目的と相まって、留学生・留学僧を同行させ、唐の各地で様々な分野の学問、思想、技術、技能を学び、学僧について仏教を習得し、書籍、経典を書写もしくは購入するなどして、文物を舶来することが顕著となった（例えば、東京女子大学古代史研究会編『聖武天皇宸翰『雑集』「釈霊実集」研究』2010年参照）。特に717年の養老度の遣唐使からは、国内制度の整備や仏教界の要請を背景にして、喫緊の学習目的を帯びる短期の請益生・請益僧と長期の留学生・留学僧とを区別して派遣制度の充実を図った。先年、墓誌の出現によって日本と中国

で熱い注目を浴びる井真成のごときは、そうしたなかで抜擢された河内国（大阪府）の渡来人系の若い人材の一人であった（鈴木靖民「遣唐留学生井真成とその出自」『遣唐使の見た中国と日本』2005年、同「遣唐使井真成の出現」『危機と文化』〈札幌大学文化学会紀要〉8、2006年）。井真成の入唐を735年の天平度であり、彼は留学生でなかったとする中国の馬一虹、榮新江、韓昇など各氏の異説がある。そうだとすると、彼は日本で寮司級の長、次官、遣唐使では判官かそれに准じる官吏であったと解さなければならない。韓昇「井真成墓誌の再検討」『専修大学東アジア世界史研究センター年報』3、2009年参照）。

日本人が留学して唐の儒学以下の学芸、法律、制度を学ぶだけでなく、卓越した技術、技能を持つ唐人を招致するように努めたことも鑑真などの例に知られる通りである。なかには735年の使の帰国に伴った李密翳のような、唐に居住したと目される波斯（ペルシャ）人の渡来もあった（鈴木靖民『古代対外関係史の研究』1985年）。

盛唐の長安こそは東西の珍奇な品物が大量に流入し、各種の金銀財宝が集積する、世界の金銀の都、貨幣の都、書籍の都、人材の都であったと表現される（榮新江「西安何家村出土の埋蔵品と西安の物質文化」『東アジアの都市史と環境史』2005年）。遣唐使の人々が接した長安、あるいは洛陽はもとより、途中の揚州などの地方都市でも文化の精華は咲き誇り、人とともに東漸したのである。

この期は、遣唐使の最盛期であり、遣唐使の制度が整い、派遣回数も多く、大勢の日本人が航海の危険を冒し辛苦の末に唐に渡った。律令制の日本国は前代以来の仏教をはじめとする唐文化の積極的な摂取を目指したので、使節や留学生、留学僧などによる唐での国際的な交流、文物の入手が進んだ。彼らは多様な成果を携えて帰国し、吉備真備を代表とするとともに（今津勝紀「吉備真備」『岡山の自然と文化』28、2009年）、日本国内の官界や仏教界など各方面にわたって活躍した。

（3）第3期－9世紀－

803～4年の延暦度と、最後となった836～8年の承和度の遣唐使とは9世紀、平安京時代における2度の大規模な派遣であり、日唐間に交流の大きな足跡を残した。

遣唐使は天皇一代一使を常例とし、この国家的事業は天皇の国家主権の所在を明示する企てにほかならないとする山尾幸久氏の説がある（山尾幸久「遣唐使」『東アジア世界における日本古代史講座』6、1982年）。近年、保立道久氏はこれを発展させて、天皇の代替わりごとに遣唐使派遣が試みられたことを強調した（保立道久『黄金国家』（2004年））。特に836年からの承和度の遣唐使と仁明天皇即位とは最も密接なつながりがあるとする。

この両者の関係を『続日本後紀』によって検討すると、仁明天皇は833（天長10）年2月即位、その前後は1月、大使となる藤原常嗣が従四位上昇叙、12月、諸山陵に唐物奉獻、834（承和元）年正月、常嗣が参議と相模守兼官、祥瑞上表、遣唐使任命、常嗣持節大使、小野篁副使、判官・録事など任命、2月、造船使、遣唐装束使、7月、常嗣近江権守兼官、8月、造船使長官、遣唐録事、准録事、知乗船事、造船（遣唐）都匠任命、835（承和2）年2月、長峯高名遣唐准判官、録事、訳語任命、12月、遣唐使借位の口宣（常嗣に正二位など）、常嗣左大弁兼官、836（承和3）年正月、常嗣正四位下、仁明、遣唐使大副使以下還学僧の引見、賜物、4月、餞を賜う、御衣、

砂金など、節刀を賜う、5月、常嗣の母氏菅野浄子、旧例により叙位、小野神社に神階叙位、遣唐使・留学などの在唐死没者藤原清河・安倍仲満（仲麻呂）などの贈位、摂津国難波口で遣唐使を慰労、使駕船、4船出港、となっている。その後、遭難などの曲折を経て、結局最終的に出発したのは838（承和5）年7月であった。

遣唐使の派遣準備は緩慢であり、任命から最初の出航まで2年半もかかっているが、仁明の天皇即位を起点として進行しており、それは天皇の皇位継承、すなわち大権掌握の過程で外交権の執行が重大事であったことを示すものと思われる。この度に限っては即位と遣唐使が相関関係にあるが、長期的で相手国のある遣唐使派遣をことごとく即位と直結できるかは疑問である。

この場合も、遣唐使が唐朝廷で朝賀に参列して唐皇帝との関係を結んだり、他の諸国との交流関係において日本の国家的地位を確認したりするような対唐政策の意を込めた国際政治上の企図はまったく汲み取りがたい。何よりも相手国の唐や東アジアの国際情勢がほとんど顧みられていない。唐の国家的変容はむろん進行していた。しかし遣唐使の文化的役割はなお明確に存在する。遣唐使に加わった請益生・請益僧、留学生・留学僧が仏教界だけでなく、各種の学問、思想、芸芸の分野にわたっていることは日本国内の各界の要求があり、国家の皇族、貴族層もそれを望み、承認したことを証明している。

承和度の遣唐使一行の航海の労苦や唐での生活、旅程の様子は、約10年滞在した請益僧円仁の日記『入唐求法巡礼行記』に詳しい（鈴木靖民編『円仁とその時代』2009年）。8世紀末以降、新羅との関係も含めて、古代国家の主導する外交がふるわなくなり、代わって僧侶の求法、貿易の利潤を目的にして派遣されるといわれる。遣唐使による交易については回数と数量とに限界があり、唐宋人の商船とは異なるもので、過大な評価は下しがたいが、使節の「国信物」などの朝貢品に対して唐での朝貢儀礼や朝賀にともなって答礼品を授けられるので、実質上の貿易が行われる側面もあった。旅程の途中で各種の唐物の買得も行われた。ただしその後、商船が搬入する唐物を、大宰府、瀬戸内、平安京のネットワークを持つような王臣家が独占するという性格もみられるが（松原弘宣『藤原純友』1999年）、それは遣唐使の停止とも無関係ではない。

延暦、承和の2度の遣唐使では、唐の最先端の仏教やその他の文化を、身を賭して懸命に学んだ人物群がひと際目立っている。留学僧の空海は入京し、請益僧最澄は入京を許されないまま、ともに短期間に精力的な求法活動を繰り広げたことはよく知られている（2010年2月、最澄の「請求目録」〈越州録〉に載る姚弁の『三教不斉論』の明応6年〈1497年〉の写本が天津市石山寺に所蔵され、その奥書に日本国求法僧最澄が貞元20年（804年）11月台州臨海県龍興寺北房で書写したとあることが報じられた）。その後の常暁・円仁・円載等々の異文化摂取の超人的な命懸けの努力、在唐新羅人の援助とその親しい交わり、巡礼と書籍や仏具の獲得の行動なども、ともども真言、天台両宗の開宗と発展、平安・鎌倉時代仏教への影響など測り知れない成果を上げた。遣唐使に直接関わらないが、円仁の在唐中に唐との間を商船に乗り、何度も往来した日本僧惠尊も特異な存在である（田中史生「円仁と惠尊」『円仁とその時代』2009年）。

唐の文人と交わって「秀才」と讃えられ、文学、書を身に付けた留学生橘逸勢や、最新の陰陽道を学んで伝えた陰陽師兼請益生春苑玉成もいる。円仁、円珍などの請益僧・留学僧に関して、彼らが仏典を将来すると同時に外典を将来したことは入唐請求目録によって知られるが、特に中

国の書儀やいわゆる古往来のもとを積極的に入手、将来したことが日本で寺院・僧侶間をはじめとして近世に続く往来物の発端につながるとして注目されている（丸山裕美子「敦煌写本「月儀」「朋友書儀」と日本伝来『杜家立成雜書要略』『敦煌・吐魯番出土漢文文書の新研究』2009年）。

彼らの獲得した先進の唐文化の数々は日本の唐風文化を醸成する因子となったばかりでなく、種々の思想、宗教、信仰をもたらし、既存の宗教、信仰に加えて、複合的な日本の信仰システムの形成に大きく貢献した（三橋正「平安貴族の信仰構造」『平安時代の信仰と祭祀』2000年）。広げていえば、この時期、遣唐使を通じてもたらされた唐の思想、文化は日本文化の国際化に作用したのである。

この外来仏教を要素に含む信仰が時の国家支配層の意思を反映するものであったことから、遣唐使派遣への執着ぶりを社会不安に対処する鎮護国家形成のためであったとみる見解もある（佐伯有清『最後の遣唐使』1978年）。ともかくこの期に遣唐使の蒔いた種は見事に豊かに開花したのである。そしてこれ以降、遣唐使は途絶えた。

894年、大使に任命された菅原道真が在唐僧中瓘の報告を機に、唐の情勢、新羅の海賊の横行などを主な理由にして停止を願って認められると、遣唐使の制度は終息した（鈴木靖民『古代対外関係史の研究』1985年、森公章『遣唐使と古代日本の対外政策』2008年など）。

Ⅲ．唐人・異国人の渡来

遣唐使といえ、日本から唐への外交、国際政治、唐からの文化摂取という意味合いが濃いことは否定できない。しかし日唐の双方向的な視点からは、日本社会に住む渡来人（帰化人）と、彼らに対する国家による支配の関係も問題である。8世紀において、遣唐使に応じて唐の使節が来ることは稀である。だが、遣唐使の帰国に伴って送使として来日した唐の官吏が、そのまま日本に住み、朝廷に長年仕える例が多くはないがいくつかある（韓昇『日本古代的大陸移民研究』1995年、同『海東集—古代東亜史実考論—』2009年、森公章『古代日本の対外認識と通交』1998年など）。

735年の袁普卿、761年の沈惟岳、徐公卿などがよく知られる。下野国府（栃木県）出土木簡に見られる同国に員外史生として赴任していた陳廷莊も唐人の可能性もある。736年、唐楽を奏する皇甫東朝とともに来た皇甫昇女は唐人女性である。また『唐大和上東征伝』などに知られる通り、754年、遣唐使にともなわれて来日した唐僧は鑑真と法進、思託以下の弟子、高僧、優婆塞たちが余りにも有名である（葛継勇『《続日本紀》所載赴日唐人研究』〈浙江大学博士学位論文〉2006年など）。なかには安如宝のような西域（ブハラ）人、軍法力のような崑崙（東南アジア）人の系統も含まれていた。それ以前、渡来して東大寺大仏開眼にも関与したバラモン（インド）僧菩提遷那や林邑（ベトナム）僧仏徹もいる。736年の遣唐使の帰国に従った前述の李密翳は波斯（ペルシャ）人である。彼らは直接母国から来たのではなく、唐の長安や洛陽、揚州、広州などに来住して活動していた唐社会の異国人である。いわば峻険な熱砂のシルクロードを越え、逆巻く波濤を渡って唐、日本や新羅を往還した僧俗は、文献に留められただけで実に2100人以上にも上るといふ（東大寺教学部編『シルクロード往来人物辞典』1989年）。

人数は限られるにせよ、彼ら、彼女らの多彩な民族性とその身に纏う独自の技術、技能などの先進的な外来の文化は唐の「周辺」または「辺縁」に位置する日本の文化に注入され、単に珍重されたのみでなく平城京・平安京の都城社会の構成や展開に及ぼした影響は強烈なものであったに違いない。彼ら唐人の存在、生活が支配層の意図した中国規範の都城をビジュアルに創出することに役割を果たした面もあったに違いない。近年発掘調査で明らかにされた平城京の最南端の羅城門の両脇のみに羅城を築いたこと（下三橋遺跡）は防衛的機能よりも、唐の都城の矮小化された模倣にはかならないし、平安京の羅城門・朱雀大路の存続も唐風の壮麗な都城を在京者や来京者に見せつける意味が込められていた（生島修平「羅城門・朱雀大路の存続と京職」『白山史学』45、2009年）。先進的な技術、技能、あるいは外来の学芸、思想などにはなお渡来人系が相承する世襲的な役割が期待されており、重要であった（鈴木靖民「古代日本の渡来人と技術・技能移転」『国学院雑誌』109-11、2008年）。そうした物証の一端は、今日まで残る奈良の正倉院宝物の各種工芸品の外来的要素に窺うことができる。これらの唐人・異国人とその文化の渡来、受容は度々の遣唐使に伴うものであった。

IV. 東アジア史の視角

日本からみた遣唐使の意義は日本史にとって大きいものがある。しかし遣唐使の意義を東アジアのなかで、あるいはユーラシアの規模、概念で考えるには、まず唐の対外支配や日本と交流のあった新羅・渤海との関係にも目を向けなければならない。

唐ないし東アジアの国際関係に関しては、日本・中国・台湾・韓国・アメリカなどの研究者による体系、秩序、圏をめぐる諸説がある（宋成有『東北亜伝統国際体系的変遷』2002年）。東アジアの諸国、諸地域間それぞれの外交や交流についての個別の考察を、唐国家と「周辺国家」の関係として中国の側から総括した研究もある（王小甫主編『盛唐時代の東北亜政局』2003年）。

日本では、40余年前の中国史家西嶋定生の提唱以来（『日本歴史の国際環境』1985年など）よく説かれる中国の国家権力の支配理念によって東アジア諸国の政治秩序を構造的に捉えようとする世界論としての「冊封体制論」が最も大きな位置を占めている。例えば、中国の冊封体制下に入って初めて日本の仏教公伝が可能になったとの言説がなされてきた。この冊封体制論に対しては、現在まで色々な議論がある（菊池英夫「総論」『隋唐帝国と東アジア世界』1978年、山内晋次「日本古代史研究からみた東アジア世界論」『新しい歴史学のために』230・231、1998年、李成市『東アジア文化圏の形成』2000年、廣瀬憲雄「古代東アジア地域対外関係の研究動向」『歴史の理論と教育』129・130、2008年）。

端的にいうと、この「冊封体制論」が冊封と朝貢の方式を必須の要件とするなら、日本の遣唐使自身は「朝貢使」と自覚していたものの（『入唐求法巡礼行記』）、冊封を受けない遣唐使時代の日本に対して果たして当てはまるかは疑問であり、東アジア史の理解のためには、双方の政治目的や政治状況、政治的軍事的、そして経済的な諸関係における相互規定性を考慮に入れることが必要である。中国以外の東アジア諸国同士の多元的な諸関係も無視できない。

中国の東アジア諸国に対する国際政治論に関して、近年、中国史家の堀敏一は、冊封に代わっ

て羈靡を普遍的概念とすべきであると提起する（『中国と古代東アジア世界』1993年、『東アジアの歴史』〈講談社学術文庫〉、2009年）。

また中国の動向を見ると、李大龍氏は中国王朝と周辺諸国、諸民族の間における「藩属体制」の概念を提唱している（李大龍『漢唐藩属体制研究』2006年）。すなわち、漢の藩属観念を継承して、唐朝の統治者は広義の天下が羈靡府州およびその外の藩属地域を包含して三層構造（九州・海内・海外、府州統治区・都護府区・藩国区があり、藩国区はさらに三類ある）をなし、もう一つの先秦以来の夷夏観も作られており、これらの基礎の上に特色ある藩属観念と制度を形成し、藩臣関係の方式には内附による朝貢、戦争による臣服があった。ほかに吐番および回鶻との間の舅甥関係もあり、藩臣が都護府に管轄されたのに対して、管轄機構がなかった。また突厥との敵国関係もあったとした。倭については、第三の藩国区に属するが、唐とは実際藩臣関係になく、631年、太宗は唐朝に遠いゆえに倭に朝貢させる詔を下さなかったし、倭も臣を称するのを願わなかった（『旧唐書』倭国伝）と、唐の藩属観念構造および倭の特異な立場を指摘する。

李方氏は、唐人の広義の天下は唐と交流のあった世界を指し、『唐六典』礼部には「七〇余蕃」を列挙するが、うち日本・大食・吐蕃・東天竺・西天竺・北天竺・中天竺などは唐朝の外に完全に独立する国家であると論じる（李方「試論唐朝的“中国”与“天下”」『中国边疆史地研究』2007-2）。これらの見解に従うと、同じ東アジアに位置する朝鮮半島諸国と日本では、中国王朝との国際関係には差異があることになる。古代中原王朝と高句麗、百濟、新羅との関係、ことに「辺境」政権との戦争、朝貢、冊封、藩属体制などをどう捉えるべきかが問題である。また8世紀の日本のごとく、唐の冊封、羈靡の下の有無にかかわらず、それぞれの違いのなかで、あるいは違いを越えて現実的な交流が繰り広げられる事実もあるのである。

換言すれば、空間上も外交上も、中国という「中核国家」に対して、「周辺国家」の朝鮮、「辺縁国家」の日本という措定ないし比喩が目され（穴沢味光「世界史のなかの日本古墳文化」『文明学原論』1995年）、それが諸国、諸地域間の関係や位置をいかなる歴史的事態と特質をもって東アジアのなかで具体的に把握できるかが、問題であるに違いない。これはB.カーンリフのヨーロッパ文明モデルをもとに穴沢味光氏が漢魏から唐の時代の時期により変容する東アジア文明モデルを中核、副次核、境界、辺縁と設定したものを国家論として応用し、古代東アジアの三層構造を想定してみるものである。

8世紀の律令制段階の日本国の場合、唐の国制を規範としながらも、現実の外交や国際政治においては7世紀後半以来の新羅の影響を頻繁に受け（鈴木靖民「古代東アジアのなかの日本と新羅」『前近代の日本列島と朝鮮半島』2007年）、しかも渤海とも関係を形成するという多元、多重の関係や構造を取って展開している（鈴木靖民「日本律令の成立と新羅」『日唐律令比較研究の新段階』2008年）。この点も、特に外交、文化にわたる対外的スタンスは、日本が中国中心の東アジアにおいて独自の「辺縁国家」に位置していることと大いに関係すると考えられる。このことは「辺縁」自体も、さらに「周辺」「辺縁」を有して「中核」化しうることを想定できる。

これとは別に、東アジアには漢字、仏教（漢訳經典）、律令などの中国に起源を持つ共通の文化事象が認められる。これらには国家間の使節などの関与による伝播、受容が見られるが、同時に僧侶や文字技術に長じた人たちの移動が密接に関わっている。「冊封体制論」ではこれを国際

関係、国際秩序のなかに一括して捉えるが、東アジア文化論として一応切り離す議論を経過することも必要であろう。東アジアに限られないであろうが、国家間の文化受容には多くの場合、漸進的、段階的なプロセスがあり、また国境（一国）を超えた多彩な組み合わせのネットワークの形成が見られる（田中史生『越境の古代史』2009年）。

実は、このような政治的、社会的側面を重視した議論ではない東アジア史、東アジア世界の構想も早くから存在する。1960年代から70年代にかけて、藤間生大氏が古代から近代に及ぶ東アジア世界全体の構造的連関、相互依存関係について、上述の言説とは次元の異なる時空ともに巨視的な視角を提示してから久しい（『東アジア世界の形成』1966年、『近代東アジア世界の形成』1977年）。そこでは生活や文化、生産諸力など、いわば広義の国境を超える文化の展開について、日本、中国、朝鮮半島を包摂する東アジア世界像の構図を示している。この学説は表立って必ずしも継承されていないが、再考に値する。今日、世界に向けて提示可能な東アジアからの地域史モデルがどの程度意識的に追究されているかにもかかわっている。

最近、韓昇氏も東アジアの国際関係の冊封関係を含む規定性を認め、その関係が絶えず変化を生じることとともに、ほかに東アジアの文化伝播と交流を重視すべきことを論じる（『海東集—古代東亜史実考論—』2009年）。文化の受容・導入について、公的な交流の遣唐使による限り、政治と無媒介に切り離して認識することはもちろん適切ではない。日本における国家と密接な仏教の受容という特殊なありかたを考えれば当然のことであるが、唐でも日本の仏教界が憧憬的とした仏教は円仁が遭遇した会昌の廃仏に典型的なように、時に排斥の憂き目にすら遭い、政治と決して無縁ではなかった。加えて唐やそれ以前の時代の中国仏教が在来民俗的な道教的思想と混淆するというシンクレティズム、あるいはハイブリッドなありかたも注目されている。そうした唐の奥行きのある仏教に、遣唐使時代にも、渡海した日本僧たちは接触しつつ、修学した。中国化（唐化）した仏教を東辺の僧侶や支配層は摂取し、日本にもたらしたのである。

さらに、遣唐使という呼称はないにしても、唐の周辺諸国が唐に送った使節や学生・僧侶や商人は多数おり、色々な民族が唐に移動し定住する数は、日本の遣唐使の比ではなかった。アジア、東部ユーラシアという視点でみると、中央アジア、シルクロードの突厥人、ソグド人、または波斯人などは前代以来唐の各地に住んで漢風の姓を名乗り、官吏となったり商業活動を行ったりした。時代を溯れば6世紀、北齊・北周の時、彼らの行動は東の山東にまでも及び、仏教伝播にも絡んだ形跡が当時の要衝であった青州の龍興寺遺跡の仏像などに認められる。これらのことと『三国遺事』『三国史記』に語られる高句麗、新羅の仏教が胡人の僧侶の手で伝播したとの伝承は結び付く可能性がある。この西方からの文化の流れは百済、さらに倭（日本）へとつながっている。（鈴木靖民「七世紀の百済と倭国の交流」『百済“佐官貸食記”の世界』2009年）。また近年では、例えば2003年、西安発見の北周涼州薩保史君墓のごとく、ソグド人系の文字史料と図像資料の出現が、唐における商隊首領の生活をビジュアルに示すものとして留意されている（『文物』2005—3）。太原発見の隋の虞弘墓も同様の事例であろう（山西省考古研究所ほか『太原隋虞弘墓』2005年）。そのソグド人の墓誌は現在まで83人のものが明らかであるという（福島恵「唐代ソグド姓墓誌の基礎的考察」『学習院史学』43、2005年）。彼らの生活や社会が唐代の中国、ひいては東アジアの国際的な特色あるありようを象徴的に示唆するのではないか。

東アジアでは新羅の使節は18回、渤海の使節は177回も任命、派遣され、主に朝賀、皇帝などの即位慶賀、弔問、謝恩を行った（権恵永『古代韓中外交史』韓国・一潮閣、1997年、濱田耕策「渤海国の対唐外交」『日本と渤海の古代史』2002年、同「新羅の遣唐使」『史淵』145、2009年、酒寄雅志「渤海の遣唐使」『遣唐使の見た中国と日本』2005年、楊軍「東亞封貢体系の確立」『中心と周辺からみた東アジア』2007年）。それぞれの国の留学する学生や僧侶も多く、ある時期の諸国の留学生は8000人に上ったというが（『旧唐書』）、新羅の場合、別枠の官吏登用試験にパスした賓貢進士が合わせて100人程はいたと想像されている。皇帝の護衛兵の宿衛となる王族もいた。渤海の場合も同様であろう。

李大龍氏は、使節による朝貢形式などの往来を通して唐と周辺諸国、諸民族の関係を究明している（『唐朝和辺疆民族使者往来研究』2001年）。

7世紀後半に遡ると、唐に帰服した高句麗、百済の王族、貴族が洛陽に居住しており、その墳墓および墓誌も12点以上知られている。洛陽の異国人は都城の南のほうに集住させられており、最近、その墳墓も改めて確認されるようになってきた（『東北史地』など）。

唐の朝廷に仕えた異国人は蕃官（軍官は蕃将）と呼ばれたが、唐人の官吏と区別なく扱われた。日本、新羅の僧侶で修学して9年経っても帰国しないものは僧籍に付けられた。留学生には衣糧が支給された。日本人で帰国できず、唐で生涯を終えた人たちはもちろんいた。阿倍仲麻呂、藤原清河（河清）が有名であるが、遣唐使の船師や乗組員など無名の人もいた。遣唐使は唐の多彩な人々と文化とに交わり合い、世界へと通じるゲート・ウェイを歩んだのであった。このように、唐では中華思想と表裏の関係をもって、周辺諸国、諸民族の人々を多く擁する、開放的なコスモポリタニズムがみなぎっていた（石見清裕『唐の北方問題と国際秩序』1998年、『唐代の国際関係』2009年）。そうした唐の生活、社会環境のなかで、遣唐使をはじめとする人々は唐理解に努めたのである。

V. アジア・東ユーラシアへの広がり

ところで、唐代にも遣唐使から離れて、古代日本国の動きが東アジアの唐、新羅という1、2国の関係だけでなく、アジアや東部ユーラシアの諸国の動きとつながっている事実もいくつか挙げられる。

例えば、7世紀半ばの隋唐の周囲への膨張、特に西の高昌の滅亡の報は東の高句麗・百済・新羅、日本に伝わり、それぞれの政変、政治改革を誘い、新羅・日本での中国風の律令国家志向という共通の現象を生じた（鈴木靖民「東アジアにおける国家形成」『岩波講座日本通史』古代2、1994年）。9世紀前半には、新羅・日本の王権・国家の衰退のなかで、新羅南東部の莞島（清海鎮）に根拠地を持つ張保高（張保臯）の勢力が出現し、新羅・唐・日本3国を股にかけた海上交易活動を担って、日本の大宰府官人、平安京の王臣家の交易とつながり、あるいは新羅王権と結んだ（蒲生京子「新羅末期の張保臯の抬頭と反乱」『朝鮮史研究会論文集』16、1979年、李炳魯「九世紀初期における『環シナ海貿易圏』の考察」『神戸大学史学年報』8、1993年、孫寶基編『張保臯と清海鎮』韓国・慧眼、1997年、李基東「張保臯とその海上王国」『アジア遊学』26・27、

2001年、濱田耕策『新羅国史の研究』2002年、渡邊誠『文室宮田麻呂の『謀反』』『日本歴史』687、2005年)。その一方で、日本の遣唐使や円仁の使命、目的が張保高を含む在唐新羅人のネットワークの強力な援助、協力を得て達成できたという事実も重要であり(金文経「円仁と在唐新羅人」『円仁とその時代』2009年など)、新たな国際動向、国家の時代の到来を示唆する。

最近、この古代日本、日本人の内外での動向と東アジア各地との複線的な関わりだけにとどまらず、はるか中央アジア、ユーラシアとのつながりを構想する見解も示されている。

平城京などにはこの地域に出自をもつ西域の胡人もいたであろう。上述した李密翳はその一人である。2009年6月、奈良市の西大寺旧境内で青緑色のイスラム陶器(壺)の破片が出土し、共伴した木簡により8世紀半ば頃のものであることが報じられた。従来、北部九州の大宰府跡や多々良込田遺跡のような官衙関連遺跡などで9世紀以降の例が知られるが、8世紀に溯って、多分、唐の揚州などから海を越えて大宰府にもたらされ、瀬戸内を経て平城京に至ったことが想定される。

日本と関係の深かった渤海の交流のなかでは、極東ロシアから南モンゴル、南アルタイを経て、ロシアのセミレーチュェに達する「クロテン(黒貂)の道」というソグド商人の毛皮貿易路があったとするロシア人考古学者、E. シャフクノフの構想がある。また中国東北の遼代の墳墓出土の琥珀容器の原料分析を基に、バルト海の琥珀が西アジア、中央アジアの商人の手で草原のシルクロードを通して運ばれたとする香港の研究者、許暁東氏の説が提出されている(鈴木靖民「東北アジア史のなかの渤海の国家と交流」『古代日本と渤海』2005年、同「渤海の国家と対外交流」『東アジアのなかの渤海と日本』韓国・景仁文化社、2008年)。前者の場合は『新唐書』にいう渤海の「日本道」を経て日本海を渡り奈良・平安時代の日本に着くのである。どちらもユーラシアの東西を結ぶ大動脈、シルクロードの意義を考えさせる壮大な仮説である。8～9世紀の日本の交易の品々が間接的にせよ様々な経路により中央アジア、北アジアの交易とつながっていることを物語る。

国際情勢や政治についても、第2次大戦後日本の歴史学を牽引した石母田正が、8世紀の政治史の最も重要な事件として取り上げたのは2度に及ぶ新羅出兵計画であるが(『日本の古代国家』1971年)、これをさらに広げ、一国史の枠から解き放って、東大寺大仏の建立と新羅出兵計画を、同時代の安史の乱をはじめとするユーラシア全体の歴史のなかの絡みで理解しようとする近年の説もある(保立道久「東大寺大仏と新羅出兵計画」『歴史地理教育』2004-8)。

755年の安祿山・史思明の乱は、751年、西トルキスタンのタラス河畔の戦いがソグディアナ諸国とアッバース朝イスラム(アラブ)の連合軍が高句麗の出自の高仙芝率いる唐軍を破るユーラシアの激動のなかで起こり、それを好機と捉えた渤海が日本に新羅出兵を働きかけてきたとみる。これに対して、石見清裕氏は、タラス河畔の戦いは唐からみれば遥か西方での出来事、唐と中央アジアの関係が根底から崩れたわけでないとし、東アジアの国際体制を根底から揺るがしたのは755年に始まる安史の乱であるとする(『唐代の国際関係』2009年)。この両者の事件を結び付けていかなる因果関係で捉えうるか否か、大きく転換する唐代史の本質に深く関わってくる。

史書を細かく見ると、763年、渤海によって日本に安祿山らの反乱が報じられ、翌年に新羅出兵計画が止むことになる。その間、さらに8年前、それに12年前の事件にどれほどつながるかは

慎重な判断を要するであろう。けれども日本史にとっても、藤原氏などの権力争いを伴いながら行われた8世紀の日本の内政、外交、軍事意欲を、イスラム勢力の動向、仏教、戦争というユーラシア世界でのダイナミックな歴史展開を視野に収めて俯瞰しようとする思いがけない魅力的な試みであり、惹かれるものがあるといえよう。

東アジア史の議論のなかで、東アジアの「地域」や「世界」という意味、概念の曖昧さが指摘されているが、東ユーラシアないし東部ユーラシアという広がりをもって史実が理解される傾向にある。最近も、菅沼愛語氏は670年からの唐と吐蕃の3次にわたる戦争、唐の敗北を大きな契機として新羅の唐を駆逐しての朝鮮半島統一、突厥の復興、契丹の反乱、渤海の建国という動きがあり、それらが互いに緊密な交流を有し、すでに文化、制度を摂取しつつあった唐・新羅・百済・高句麗から直接的なインパクトとして日本にも及んだと、7世紀後半、8世紀初めの歴史の激動をユーラシア規模で展望しようとしている（「七世紀後半の『唐・吐蕃戦争』と東部ユーラシア諸国の自立への動き」『史窓』66、2009年）。しばしば論じられる隋唐の膨張が中国の東西地域に諸国の衝突や国家確立をもたらすよううねりとなって表れたと見なす以上に、大きな背景が描かれ、刺激的であるが、それぞれの地域社会ごとの律令制志向に見られる内的動向もまた忘却すべきでないであろう。日本史とのかかわりにおいても、東アジア、北東アジアからユーラシアへと広がる世界歴史像が徐々に浮かび上がりつつあるといえよう。妹尾達彦氏が地形、環境、気象などを考慮した、アフロ・ユーラシア規模の人類史構築を提唱するところ（『長安の都市計画』2001年）、果してリンクするであろうか。

Ⅵ. おわりに

唐代の中国の国際関係において、重要なのは北アジアや中央アジアとの関係であり、日本など東アジアとの関係は重視されていないとする意見がある。中国史に最も大きな影響を与える外部勢力は、まずに北方の勢力であり、ついで西方からのエネルギーであるという（石見清裕『唐の国際関係』2009年）。このことに関しては、商人の交易活動を規制した唐の関市令には「西辺・北辺諸関」の文言があるが、東方はどうであったか触れるところがない。唐の対外政策において、北や西に比して海路を取る東辺は区別され、格差がついているのである。

森安孝夫氏は唐代に空海か円珍によって日本に将来された漢文とチベット語のバイリンガルで書かれた「東洋世界地図」には日本も朝鮮も表われていない唐代中国人の認識を現実的に認め、東アジア論としていかに捉えるべきかを提起している（「唐代における胡人と仏教的世界地理」『東洋史研究』66-3、2007年）。森安氏は類例として西安出土の9世紀唐代の銀盒銘文の唐周辺の仏教国を描いた図像と銘文に日本、朝鮮が記されていないことを挙げている（渤海と推定される「高麗国」はある）（赤羽日匡由「都管七国六瓣銀盒銘文の一考察」『人文学報』346、2004年）。つまり東アジアの概念や範疇は歴史的にもその認識する主体によって差異があり、一定しているわけではない点に注意を払うのである。上記の例は、唐代における周辺諸国の地理観その他の可変的な見方であるが、ある時期の仏教界、僧尼層の考えの反映が根底にあらう（9世紀以後の日本の仏教界において興ったと見られる「大日本国」意識、その後の本朝、唐、天竺の「三国」観

の形成ともかかわるであろう)。

東アジアの国際関係論、システム論と古代日本とアジアないし東部ユーラシアの交流論、内外情勢連動論は東アジアの地域や世界、その概念の流動的な広がりの可能性を示唆しており、唐、日本、新羅などに対する一様でない、多元的な東アジア史への認識を促していると思われる。

最近、李成市氏は既成の冊封体制論より発する議論を踏まえて、あらためて現代の東アジアが抱える問題に根ざす歴史的課題に応じた東アジア史論の新たな構築の必要を唱えている（「古代東アジア世界論再考」『歴史評論』698、2008年）。

あたかも現在、日本だけでなく、中国、韓国では発掘成果に基づく遺跡や遺物、出土史料の出現が相次いでいる。そこから描かれる歴史像は様々である。しかも、これらのなかには、例えばインドから西域、中国、朝鮮、そして日本へと東伝するにつれて、僧侶、信者が修行し講経する建造物（石窟、寺院、僧坊など）の変容に典型的に表れる仏教施設の場合のごとく、それぞれの地域に応じた独自性を帯びつつも、一方で東アジア共通の事象を有することが少なくない。古代日本の歴史や文化の見直しの契機にもなりうる。まさにこれらの考古資料を含む新出の歴史資料に着目することを、既知の史書、史料の再検討とともに進め、各地の区々の史実の抽出と併せて、新たな東アジアまたは東部ユーラシアを貫く歴史像の探究が要請されているといってよい。豊かな事実に即した多様な地域論、世界論の現出と議論が望まれる。